

平成23年4月、「何かできることを」と思い、ボランティア情報を探していたところ、みえ災害ボランティア支援センターのホームページを発見し、気付けば5月からスタッフとして働いていました。

何もわからないまま入局し、次々に出発するボラバックや日々変化する状況に試行錯誤の毎日でしたが、多くの方々の支えがあつて今日までやつてこられたことに心から感謝です。ただ一つ、激務の末、スタッフがパタパタと倒れていく中、自分一人だけずっと元気でいることが謎でしたが：ボランティアもスタッフも健康と安全が第一です。

対策班として、山田町や三重県に避難されている方々の想い、そして、ボランティアの方々の想いをどれだけ繋げることができたかわかりませんが、本当に多くの方々との出会いがあり、沢山のことを学ばせていただきました。今後はまず自分の足を固めつつ、皆さまとの繋がりを大切に、引き続き何らかの形で寄り添っていくことができればと思います。またどこかでお会いすることがあります。ありがとうございます！



対策班長 森本佳奈
(平成23年5月1日)

災害ボランティアの経験や知識も無く、この身一つでできることを模索し参加したボラバックで、一人では微力でも仲間の思いが重なれば逞しい原動力になること、遠方から訪れて活動する意義を強く感じました。

ボランティアからスタッフへと立場が変わり、ボランティアの限界とスタッフの責任の重さを痛感しながらも葛藤し、ひたすら山田町と三重を往復する日々でした。力不足で迷惑をおかけするばかりでしたが、多くのボランティアさんの熱意に刺激され、山田町の方々の温かさや強さに触れ、スタッフの皆さんに助けていただきながら、長く携わらせてもらえたことを幸に思っています。

皮肉にも数え切れないほどの素晴らしい出逢いに恵まれ、「感謝」の本当の意味を教えてもらった二年半。山田町の魅力に夢中になるほどに、故郷を思うことの大切さに気付かされました。いただいたものばかりですが、このきっかけを今後余すことなく繋いでいけるように、胸に積もったたくさんの「笑顔」と「ありがとうの気持ち」を時間をかけて着実に返していきたいです。

みえボラに関わっていただいたお一人お一人に心の底から感謝しています。ありがとうございます。



業務補助 松岡佑美
(平成23年8月16日)
ボラバック第5・15・16便)

あの日から1年4ヶ月が経った平成24年7月、みえ災害ボランティア支援センターに入局しました。最も在籍期間の短いスタッフです。既にボラバックは山田町の皆さまに信頼されており、また、「みえで仲間をつくり隊！」は多くの交流会を実施していただきました。これまでに先輩方が築いてこられた事務局があつたからこそ、すんなりと入ることができました。

「少しでも何かできれば」との想いでボランティアをしてきましたが、スタッフになることでその想いが変わるのでは…という懸念もありましたが、それは杞憂でした。これまで以上に多くの方が温かく接してください、見守ってくださいました。震災がなければおそらく出会うことのなかった方々ですが、その方々の存在は私自身の大きな力になりました。こまめに続ける事ができた要因です。

支援センターという基盤を失うことで、これからどういう形でかわることができののか、今はわかりませんが、まずはこれまで出来なかったこと、山田町でお酒を飲みたいですね。

本当にお世話になりました。ありがとうございます。ございました!!



業務補助 谷畑哲男
(平成24年7月10日)
ボラバック第7・23・32便、
第3・4便)

みえボラ現地スタッフとして、震災の年の8月から勤めさせていただきました。

震災で多くを失い、たまたま運良く生き延びた私が、山田町とは遙か遠くの三重県のボランティア支援団体に勤めるようになるのは不思議なものを感じます。

被災地を支援する側と支援を受ける側との両方の立場である事は、気持ちの置き所に戸惑う事もありました。しかしながら、ボラバックでボランティアに来てくれた沢山の方々と間近に接することは、支援いただいた山田の人達のみならず、私にとっても良い方向へ気持ちが導かれて来たと思えます。

みえボラ活動期間中、スタッフとして三重県と山田町との間で、私がどれだけお手伝いできたか心もとありませんが、わずかでも皆さんの役に立っていたのなら、とても嬉しいことと思います。そしてみえボラに係わる全ての方々に感謝を伝えたいと思います。ありがとうございます。

業務補助(現地班) 佐藤辰也
(平成23年8月1日)



被災地にながら、罹災していない私を事務局スタッフとして迎えていただいていたから2年3か月が過ぎました。最初は何をしたらいいのかもわからない、まさに手探りの状態でした。それでも、みえボラのみなさん、活動の中で出会った方々に多くの元氣と勇氣、あたたかい言葉をいただく中で、自分ができることを探しながら、今日まで務めることができたと思っています。

自分がどれほどのことを為せたのか自信を持って言えるほどのことはありません。ですが、みえボラが残してくれたもの、事務局スタッフとして過ごした時間を無駄にしないように、そして、これからもたくさんの方々の「笑顔」に出会えるように、何らかの形で「支援活動」にかかわっていくつもりです。

まだまだ復興への道のりは遠く、厳しいものとなるのでしようが、山田町と、私自身に前に進む力をくれた、出会っていただいたすべての人に、心から感謝しています。ありがとうございます。

業務補助(現地班) 外館こずえ
(平成23年9月7日)



事務局スタッフから



センター長 山本康史
(平成23年3月14日)

ボランティア支援センターの事務局といっても何を言えば良いのか手探りの中、必要な事を自ら考え実行してくれるメンバーが揃ったことは本当に幸運でした。

誰も訪れたことのない山田町で足場を作ってくれた先遣隊のみなさん、1000km離れた現場にボランティアを毎週送り込むという前代未聞のミッションを実現してくれた三重スタッフや事務局ボランティアのみなさん、山田町の中を走り回って信頼関係をつないでくれた現地スタッフや二瓶さん、その全てをとりまどめてくれた事務局長。関わってくれた全てのスタッフに誰ひとり欠けても今回の取り組みは為し得なかったでしょう。

特に、(途中入れ替わりを含め)11名の方のみに有給職員として関わってもらいましたが、今回の事業を行う上で最も大変な思いをさせてしまったのが、この有給職員のみなさんだと思っています。ボランティア活動に有給職員として関わることには葛藤がたくさんあったろうと思いますが、みなさんがいてくれたことでこれだけ多くのボランティアがのびのびと、山田町の方々と共に活動できたのです。みなさんがまさに「土台」となってくれたからこそこのセンターでした。本当にありがとうございます！



事務局長 若林千枝子
(平成23年5月1日)

県を退職したその年に発生した大規模災害に、到底他人事には思えず「自分でできることがあれば何かしたい。」と考えていたとき事務局長就任のお話をいただきました。その際、災害ボランティア活動のための経費を「県が一部負担することを決定した。」ということも聞き、これですぐさまボランティア活動支援のスタートを切れる。事務局体制を整えることもできる。官民協働の支援センターにかける行政の決断に頭が下がりました。

とはいえ限られた経費のなかで、私自身を含めセンター長と局長補佐の伊佐さんがボランティアのまま入局しました。「みえ」の事務局5名はともかくとして、現地スタッフの募集と人選、業務環境の整備にはたいへん苦労しました。けれども今振り返ってみると、さまざまな幸運と出会いがありました。当初は1名、のち2名の現地スタッフ雇用、そのために山田町の商工会や観光協会から得られた協力が大きな力になりました。そして何よりもスタッフ一人ひとりのやる気と能力に恵まれました。そこに事務局ボランティアの協力があって、より大きく花開くことができたと思っています。「ひと」こそが「ちから」であることを、今振り返ってしみじみと思います。



事務局長補佐 伊佐彰代
(平成23年5月1日)

平成23年3月11日。地域活動の予定が夜だったので、たまたま自宅にいた所変な体感があり、テレビを点けたら思いもよらぬ映像が映されており、唾然としていたら、臨時会の連絡がありました。津に向かう途中あらちちらに、警察の方々が立ち止まらなれ、物々しい雰囲気の中運転していて、母子家庭だった頃、伊勢湾台風で被害を受け、あの時一筋の明かりにホッと「大丈夫ですか？」の一声に安堵した事を思い出しました。

微力ながら、できることがあれば何でも、事務局でお手伝いさせていただきましたが、ボランティアに参加された大勢の方の温かい思いやりと行動力には、本当に頭が下がる思いでした。

特に若い方々は学校、お仕事で時間の制約がある中よくぞ頑張ってくださいました。またセンター長、事務局長、事務局スタッフ、現地スタッフの皆さんも素晴らしい能力を発揮され、どこにこんな気力があるのかと感心いたしました。素晴らしい経験をさせていただき、本当にありがとうございます。



総務班長 番家康文
(平成23年7月6日)

一昨年の6月、陸前高田市でのボランティア活動にその一員として参加しました。そこで見た光景はあまりにも無惨で、絶対にあつていい筈のない光景でした。その後、この時の思いを契機に、結果として、当センターでお世話になることになりました。

センター事業を円滑に運営する為には、関係機関とのさまざまな丁寧な協議等が必要です。日々の業務でこれまで、その使命を遂行できたのも、センターに集う多くの皆さまのご支援・ご協力及びチームワークの結果がこれを可能にしたのではと思っています。

現代社会、なかなか安心して暮らせません。台風・地震等の自然界の怒りが時に人間に鋭く向けられ、私たちを不安に駆りたてます。しかし、そのような時でも人は支え合えます。「人は共に力を合わせれば、どのような困難でも乗り越えられる」ということをセンターにて、体感させていただきました。センターに集う皆さま、ありがとうございます。



情報班長 山畑直子
(平成23年5月1日)

私は事務局ボランティアから有償スタッフとなりましたが、新事務局体制となった平成23年5月はちょうど、それまで事務局運営を担って頂いていた方々が日常へと戻っていく頃で、余裕もないまま次々とボラパックの説明会へ出席し帰着をこなさなくてはならず、残業も休日返上もなんのその、気がつけば森本さんと二人、朝の9時から夜の10時まで差し入れの根昆布しか齧っていなかった。なんてことも今では笑い話です。

家庭の事情からなかなか山田町へ赴くことができない私は、現地の空気感等を掴むのが難しく、時には厳しいお言葉も頂きながら、また時には家庭崩壊の危機を乗り越えながら、自分自身もどかしさから心折れそうになる時もありましたが、信頼できる仲間やボランティアの皆さんの出会いにより、山田町に行くことはお任せして、「みえボラのⓂの人」としてできることを探し続けることができましたと思います。

情報班として、情報の収集、整理と共有、発信など、力不足も甚だしかった私ですが、多くの出会いに心より感謝します。ありがとうございました！